

case1
大菩薩峠
《徳島》

地球を彫刻する

内野輝明

人生はロマンとエネルギーと語る島利喜太さん。
1960年代からつくり続ける未完のレンガの城



道路から見た全景。喫茶部分が左に続く。
道路から見る。喫茶部分が左に続く

レンガの長城

徳島市から国道55号を南に走り、橋湾を通り過ぎるとすぐ右手に、ツタの絡むレンガ造りの喫茶店が目飛び込んでくる。欧州の城郭を思わせるこの建物の名前は「大菩薩峠」、オーナーである島利喜太さん自らが築き上げたものだ。

二十歳を過ぎたころから、島さんは家業である農業に従事する傍ら、5、6年をかけ、北から南へと日本一周の旅に出ている。そこで、夢に拍車をかけることになる大菩薩峠(山梨県小菅村。中里介山の未完の長編小説で全国に名が知られた)と運命的な出会いをする。この険しい峠の畝が、彼の目にどのように映ったのかは知るすべもな



アプローチのスロープ



ランブ塔

いが、「自分の山に万里の長城を築きたい」という思いに強く駆られる。コーヒー好きで、人にもうまいコーヒーを飲んでもらいたいと願う若い頭の中には、店の名は「万里の長城」か「大菩薩峠」しかなかったという。

しかし工事は苦難との戦いになった。当時、香川県牟礼町にレンガ工場があったものの、大手企業優先で個人に分けてくれるレンガはなかなか焼いてはくれなかった。それならばと裏山に窯を造り、自らも焼いた。当初、数人いた左官職人も彼の熱気に圧倒されたのか、一人また一人と姿を消し、十数万個に及ぶレンガのほとんどは彼一人で敷き詰め、また組み上げていくことになる。着工から5年目の1971(昭和46)年秋、「大菩薩峠」は待望の産声を上げた。

戦後56年が過ぎ、建築の施工システムは大きく様変わりした。村人総出で築いた茅葺屋根や、自らが参加して造る

住宅は過去のものとなり、お金さえ出せば理想の家を手に行うことができるようになった。阪神大震災の不幸に見舞われた時、被災地の多くの人々は政府やボランティアの救済を待つしかすべがなかったが、死者十万人を超えた1923(大正12)年の関東大震災の時は、被災から数日後には焼け野原にバラックの建築が建ち始めたという。

施工者にすべてを任せる建築請負システムが、戦後、どれほど住人の手足を奪っていったことか。わが家の建築に自ら汗を流すことの大切さを、また生きるということの意

味を、この「大菩薩峠」は語っているように思えてならない。オープンから今年でちょうど30年を数えるが、いまだ未完の建築である。当初、彼が目指した「レンガの長城」は、「木」そして「石」へと様相を変えてきた。近年、増築されたトイレは木で造られ、敷地奥の裏山には不思議な石の空間が築かれようとしている。かつての小学校校舎の基礎石や水門に使われていた石柱、兵庫県赤穂にあった耐火煉瓦工場の引き白石などを集め、新たな息吹を注ぎ込む。

「人生はロマンとエネルギー」と語る彼の頭の中には、もうすでにこの空間に「石の建築」が築かれていて、入り口の扉は無垢石の一枚岩であるという。オープン当初から温めてきた「石の扉」に人生のすべてが凝縮される。その日がロマンの終焉になるのか、それは彼にしかわからない。

大菩薩峠の現在

以上は、徳島の建築家 故富田眞二による2001年当時の大菩薩峠と島さんを描いた文章を引用したものである。2012年の正月、東北大震災の翌年来徳された福島建築家たちとともに富田氏に連れられて、初めて島さんにお会いした。以来、幾度となく知り合いを連れては島さんを訪ねてきた私に今回の執筆依頼がきたことには、不思議な縁を感じる。

富田氏のレポートから二十余年、島さんに会いに行ってきた。富田氏レポートの最後に出てきた石の扉は完成してすでに十余年。この厚みの石の扉が、人の手で軽々動くことに驚嘆する。石の彫刻家流政之氏もこの扉を見て、「世界にはあるかどうか分からないが日本にはこれしかないだろ」と、驚きを隠さなかったそうである。

二十代から大菩薩峠をつくりつづけてきたことは、すなわち島さんにとっては「地球を彫刻する」ことであった。喫茶店大菩薩峠はあくまで道に面した表層であり、裏山の峰にどこまでも彫刻し続けて、万里の長城の両側に喫茶店、レストランや茶室、彫刻の森が連なっていく景色を構想していた。

そもそも島氏のおじいさんが事業家で、山を削ってトロッコで土を運んで平地をつくる、というスケールの大きな彫刻家だった。島さんはおじいさんが今もしらっしゃったら、「りきちゃんようやったなあ」と言うてくれると思う、とうれしそうに話す。



作業場のほんの一部



島利喜太さん。しゃべるときは体も動く

90歳の島さん曰く

- ・なんでも自分で造らなあかん。わいの手助けするなら、三人はおらんと役に立たん。
- わいは早いけん。
- ・全部冒険、ロマンなんよ。あとは野となれ山となれ。天才、秀才では造れんもんをしようんよ。天才、秀才より、努力なや。
- ・ええカメラも持とうけど、今しようことに夢中やけん写真撮るといことにならん。
- ・どやって死のうか。迷惑かかるから自殺もできんし。富士の麓にでもいこうかな。
- ・したいことがまだようけあるけん、ロマンがあるけん、寝ても覚めても夢ができてくる。
- ・朝は店で珈琲二杯飲みながら新聞読む。そのあと家にいんで朝飯食うてから3時間寝る。
- ・そこらにある木切れ、どれもいずれは魂がでてくるんよ。そこらに置いといたら、その気になったらすぐでできるでえな。ゼロから生み出すんよ。みんなモノには魂があるんじゃ。鉄も深いけど木も深い。
- ・建築はもうこれ以上できんけどな、あの石の庭の手前に、レンガで古城をつくるつもりじゃ。それはやる。



軽々動く石の扉

うちの・てるあき

1963年徳島県生まれ。1986年大阪工業大学卒業。1986-90年山本西原建築設計事務所。1991年-92年堀淵建築設計室。1992年-99年高崎正治都市建築設計事務所。1999年独立

